

日本の女子サッカー選手の競技継続要因をめぐる 社会学的研究

—当事者のライフストーリー分析から—

申 恩真*

抄録

本研究の目的は、日本の女子サッカー選手のライフストーリーを通して彼女たちの競技継続要因を社会的に論ずることである。日本女子サッカーリーグに所属している女子サッカー選手の多くは、アマチュア選手として仕事や学業とサッカーとの両立を図りつつ競技を続ける生活を過ごしている。一方で、クラブチームによっては、チームの財政規模に応じてごく少数の選手のみをプロ選手として雇用している場合もある。よって、同じチーム内に仕事や学業とサッカーとを両立しているアマチュア選手とプロ選手が混在する中で選手たちが競技を行っている現状が伺える。

そのため、従来のスポーツ社会学における女子サッカー研究は、女子サッカー界を取り巻く環境の乏しさについて論じられてきたものが多い。一方で本研究では、女子サッカー環境の改善について述べるのではなく、厳しい環境の中で女子サッカー選手がどのような意味合いを持って競技を継続しているかに焦点を当てて述べるを試みる。

結論として、女子サッカー選手は個人的な競技継続要因を持ってサッカーを实践するが、その際、同じチーム内の選手間の関係性に影響されている点を示唆することができる。さらに1年間というシーズン単位を生きる女子サッカー選手たちが、競技の継続を決断する過程におけるライフストーリーを記述することで「今をいきる」選手たちの在り方について考察する。

キーワード：女子サッカー選手、競技継続要因、ライフストーリー

* 北海道大学大学院教育学院 〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

Sociological Research about the Sport Continuation Factors of Female Football Players in Japan

—Focusing on the Life-stories of the Parties—

Eunjin SHIN*

Abstract

This research aims to discuss sociologically the sport continuation factor of the female football players through their life story. As is generally known, most of female football players belonging to the Japanese female football league spend much time at work in their office to continue to play football and manage to work and play football at the same time. On the other hand, some female football teams employ some players as professional football players depending on the financial scale of the teams. In other words, a female football teams generally constituted of amateur players and professional players in Japan.

Therefore, most studies about female football discussed only the environment where female football players play football and the improvement in it. On the other hand, this research approaches female football from different perspective. This research tries to focus on player's meanings of continuation to play football.

This research suggests that female football players are affected by not only their personal sport continuation factor but also the relationship with other players when they make a decision to continue to play football. Furthermore, this research considers the lives of players who "live in the now" by describing life stories of female football players who are faced with a decision of whether to continue to play football or not every year.

Key Words : female football players, sports continuation factor, the life-stories

* Graduate School of Education, Hokkaido University Kita 11jo, Nishi 7Chome, Kita-ku, Sapporo, 060-0811

1. はじめに

1989年、日本女子サッカーリーグ^aが創設された。当時は、多くの女子サッカーの企業チームが女子サッカーリーグに所属しており、そのチームは資金面において企業からの支援を受けていた。しかし、1996年アトランタオリンピックのサッカー日本女子代表の予選敗退や1990年代後半における日本社会の経済的な不況期を原因として、女子サッカーの企業チームは相次ぎ廃部されることになった〔東明ら, 2003; 輪田ら, 2012a〕。その後、女子サッカーリーグの存続をめぐる憂慮の声もあがり始めたため、リーグ事務局はリーグへの参加基準を下げ、リーグに所属できる女子サッカーチームを確保することに務めた。女子サッカーリーグは、このような1990年代の紆余曲折を経て存続されてきたと考えられる。〔田口, 2009〕

2000年代に入ってから多くの女子サッカークラブチームは企業からの支援がなくなったため、資金難の問題を抱えるようになった。そうしたクラブチームは、財政規模が縮小され、チームをぎりぎりの資金で運営しなければならなくなった〔輪田 2013〕。これらのクラブチームは、女子サッカー選手へ人権費を払うことが厳しくなった。それゆえ、選手たちはサッカーだけで生計を立てることができず、女子サッカー選手の多くは、アマチュア選手として仕事や学業とサッカーとの両立を図りつつ、競技を継続する生活を過ごさなければならなくなった。一方で、クラブチームによっては、チームの財政規模に応じてごく少数の選手のみをプロ選手として雇用している場合もある。そのため、同じチーム内にアマチュア選手とプロ選手が混在している現状が伺える。

以上の女子サッカーの現状を踏まえ、スポーツ社会学における従来の女子サッカー研究の多くは、女子サッカー界を取り巻く環境の乏しさ〔東明ら, 2003; 石山ら, 2009; 輪田ら, 2012a・2013; 大勝, 2013〕について論じられてきた。一方で本研究では、女子サッカー環境の改善への必要性について述べるのではなく、厳しい環境の中で女子サッカー選手がどのような意味合いを持って競技に継続しているかに焦点を当てて述べることにする。

さらに、彼女たちが全国トップリーグで活動することを目指している女子サッカーチームに入団した過程から、現在、競技を継続する過程を当事者である女子サッカー選手のライフストーリーから分

析を展開する。よって、本研究は女子サッカー選手の競技継続要因をめぐる選手の視点から述べることで女子サッカーへの新たな捉え方を提示するものである。

2. 目的

本研究は、日本の女子サッカー選手が競技を継続する要因を選手たちのライフストーリーから社会的に明らかにすることを目的とする。また、女子サッカー選手が競技を实践する上で選手間にどのような問題が生み出されているかを視野に入れながら論ずることを試みる。

3. 方法

上記の目的を達成するため、まず女子サッカーに関する文献の収集および先行研究の検討を行った。さらに、女子サッカーの歴史的な事実やその事実に対する当時の女子サッカーの現状を把握し探求するため、女子サッカーに関する歴史的な資料を検討した。それに関する資料や参考文献を通して、今の女子サッカー界について理解することに務めた。

また本研究は、日本女子サッカーリーグに所属しているチームで活動している選手を研究対象と設定し、調査方法として参与観察とインタビュー調査を行った。調査に協力してくれた選手が所属しているチームは、チャレンジリーグに所属しているKチームやPチーム、なでしこリーグ2部に所属しているOチームである。3チームともなでしこリーグ1部へ昇格することを目標にしている。調査実施における詳細は、次のようである。

まず、Kチームでは、参与観察した内容をもとに、2015年4月にKチームの選手にインタビューを行うための事前調査用紙を配布し、翌月からインタビュー調査を始めた。リーグ中は、Kチームの選手15名と、チームがシーズンオフに入った後はその15名のうちの選手2名にインタビューへの協力を得ることができた。その後、Oチームの選手1名とPチームの選手1名にインタビュー調査を実施した。

以上の調査データの中で本研究では、競技継続に関して語っているKチームの選手3名のライフストーリーを中心に、女子サッカー選手が競技を継続する要因について記述する。

4. 結果及び考察

(1) 競技を实践するという決断——Aさん

Aさんは、一般企業で働きながらKチームで6年間活動している30代の選手である。彼女は怪我

^a 本研究でいう「日本女子サッカーリーグ」とは、2015年シーズンにおいてホームとアウェー形式でリーグ戦を行う「なでしこリーグ1部と2部」、3部に相当するとも言える「チャレンジリーグ」までのリーグを指す。

をしたことで、前シーズンを終わりにして選手生活を辞めようとしていたが、今シーズンからKチームに復帰している。復帰した理由についてAさんは次のように語っている。

A：1年間やりますーっていうのが毎年ずっと思ってた去年1年も最初に「20代最後だし、今年最後」って思ったけど、まあ、怪我してこの年になれば、自分がなんていうの、全国リーグで活躍するとかっていうよりも…まずはチームを全国リーグにあげたいっていうのは、一番目標だったよね。そのために自分ができることはやるし…（選手生活を）最後にしようかなってずっと思っていたけど、監督とも話して、一番のきっかけは、監督が「怪我で1年できなかったから、その、自分が復帰して、どれくらい全国で通用するか試して見れば良いじゃん。そこで、最後の1年にするのか、何するのか、それを試して見ろ」って感じで言われて、それもそうだなって思って、だからまあ、今年の初めに、じゃ、やろうかなって決断したかな（インタビュー内の（）の内容は筆者による補足、以下同じ）。

「1年間やりますーっていうのが毎年ずっと思ってた」という語りから、選手が競技を継続するか否かを定める期間は「1年間」の単位となっていることが分かる。それは、新しいシーズンを迎える前、選手がチームでサッカーをすると決めたならば、1年の間はこのチームで競技を継続しないといけないことを意味する。

Aさんは、Kチームに復帰した理由は、監督に「自分が復帰して、どれくらい全国で通用するか試して見れば良いじゃん」と言われ「それもそうだなって思って」と言っている。Aさんにとって監督との相談が競技を続けるか否や影響を受けていることが分かる。そして彼女が「全国リーグで活躍するとかっていうよりも…まずはチームを全国リーグにあげたい」と語っているように、全国トップレベルを目指しているチームで活動している選手だとしても必ず、選手自身がトップレベルの選手になろうとするのではなく、選手自身がチームの目標を達成させることに貢献するために、このチームで活動していることが分かる。

ここで、仕事とサッカーとの両立をする生活を1年間過ごさなければならぬことを視野に入れた上で、復帰することを決めたかについて質問すると、Aさんは次のように回答した。

A：サッカーだけ日中トレーニングして、夜練習して、ケアしてとか、それはすばらしいことだと思うし、それが理想…サッカーやるためには、仕事でお金をもらわないといけないから、それは自分の中では今までやってきたことで当たり前のお話であるから。

「サッカーやるためには仕事でお金をもらわないといけないから」という語りのように、Aさんは、サッカーだけでは生計を立てることができない環境にいる。彼女はサッカーをするため、仕事でお金を稼いでいるのである。彼女にとってサッカーをする間は、サッカーと仕事との両立が「当たり前」なことになっている。そのため、Aさんが復帰をする決断において、仕事とサッカーとの両立することは、Aさんには大きい問題にならなかったのである。一方で、なぜ両立をしながらサッカーを継続する理由について聞くと、Aさんは次のように語る。

A：最初にも言ったけどね、1年をやるっていう、サッカーと向き合うっていうことは、やっぱり、それなりの覚悟とか必要だから、それをじゃよし！頑張ろうって持っていくには、まあ、来年のことは、まず今のところ考えられないっていうのが一つと、だから、今シーズン終わってゆっくり考えようかなっていうのと、だから、もしかしたら、来年いるかもしれないし、本当にやめるかもしれないし、そこはちょっとわからないかな…シーズンオフに絶対入るから、1月とかに入ってから、多分2月スタートとかになるから、そのスタートするときに、もしこのチームにいるんだったら、本気でサッカーと向き合う、サッカーに集中するっていう環境を、自分の中でも肉体的にも精神的にも整えないといけない。

Aさんの「1年をやるっていう、サッカーと向き合う」という決断をしたならば「来年のことは、まず今のところ考えられない」「今シーズン終わってゆっくり考えようかなって」と語っている。シーズン初めに決断した覚悟が、競技を継続する間、常に働いていることが見られる。覚悟したため、両立の大変さは問題にならないのである。「サッカーに集中するっていう環境を、自分の中でも肉体的にも精神的にも整えないといけない」と、サッカーをするにおいてAさんは周りの環境を変えることより、自身自身のことを整えようとするのである。

また「もしこのチームにいるんだったら、本気でサッカーと向き合う」というAさんの語りから、本

気でサッカーと向き合うことが K チームの選手に適合する姿勢であることが分かる。つまり A さんは、K チームで活動する間、このチームの目標に相応しい態度で本気でサッカーに取り組みながらサッカー続けているのである。

(2) 競技実践による選手自身の成長——B さん

B さんは、今シーズン、プロ選手として雇用される形で K チームに入団した 20 代の選手である。

B: サッカーは大学で辞めて、教員採用試験に受からなかったから、講師の登録してそれやりながら勉強して、また来年受けようって、それでそう風に決めてて、最後の大学の大会に出たときに（プロとして雇用する）話をされて…大学の3年の時に、全国準優勝まで行って、その時の感動とか、ずっと残っていて、もう一回そこまで行きたいから、最後の年で、また、あういう（勝利の喜び）想いをして終わりたいと思ったけど、2回戦で…後半の41分とかに1点入れられちゃって負けたんですよ。それで負けた時に、もう一回ああいう想いをしたいなと思って。

B さんは、大学卒業と同時に選手生活を引退しようとしていたと言う。しかし、彼女が所属していたチームは、最後の大学の大会で負けてしまった。彼女は過去に経験したサッカーの喜びと感動を再び感じてから引退したいという願いを叶うことができなかった。そのため B さんは「負けた時に、もう一回、ああいう想いをしたいな」と思ったと語る。その際、K チームからプロ選手として K チームに入団することを提案されたので、K チームに入ることになったと言う。

B: 今まで、知ってる人がいないチームに入ることが全くなかったから、それが不安だったのと、プロ契約というのが、それに値するレベルじゃないってずっと思いながら入ったから、他の選手からどう見られるかとか。

B さんは仕事とサッカーとの両立をしなくても生計を立てることができるプロ選手として K チームに入団した。だが、プロ選手である B さん自身のことが「他の選手からどう見られるか」を意識しながら、K チームに入団したと言う。それは女子サッカーというスポーツを実践する場では、上記の A さんの語りのように、仕事とサッカーとの両立をすることが当たり前だと考えられている場だからであ

る。そのため、サッカーだけで給料をもらえる B さんの入団条件は、仕事とサッカーを両立している選手とは異なる条件でサッカーを実践することになるのである。さらに B さんは「知っている人がいないチームに入ったこと」が他の選手、つまりチームメイトとの関係を築くことに憂慮していたことが分かる。その中で B さんは、プロ選手として試合での勝利という K チームの共通目標に貢献する立場でサッカーに臨まなければならないことになる。

B: 勝っても自分がイマイチなら、喜べないし、チーム勝ったのは嬉しいけど、自分のプレーに関しては全然嬉しくなかったし、自分がプロだからということもあると思う。

しかしながら、彼女にとってチームの共通目標が達成できても「勝っても自分がイマイチなら、喜べない」という。彼女は、プロ選手としての彼女自身のプレーに満足することができなかった場合、心から喜ぶことができなれないと言う。喜ぶことのできない理由は、自分のプレーに満足したいという B さんである一方で、プロ選手という B さんの立場から起因する点を言える。彼女は他のアマチュア選手より良いプレーをしなければならないというプロ選手としてのプレッシャーを抱えているのである。

B: プロはただ金だけもらってサッカーしているみたいな、風に思っているかもしれないけど、それぞれ、それなりにプレッシャーとか、来年どうなるという不安とかある。

「プロはただ金だけもらってサッカーしているみたいな」という B さんの語りのように、プロ選手として雇用されている B さん自身は、サッカーだけで給料がもらえる反面、彼女のサッカー実績によって次のシーズンもプロ選手としてサッカーに携われるかという不安を抱えている。彼女の良いプレーは、来シーズンの自分の立場に繋がることを自覚していることが分かる。つまり、サッカープレーの質がチームメイトやスタッフによる B さんに対する評価となるのである。そのような評価へのプレッシャーがある中で、B さんはサッカーを行っているのである。そのようなプレッシャーを感じる中でいつまでサッカーを続けたいかについて彼女に聞くと、

B: これ限界だって感じたらやめたい。でも、遊びでフットサルとか。そういうのは地元に戻った後にしたいな、とは思う。趣味みたいな感じではしたいなとは思う。真剣に本気で

やるのは、自分の体に限界を感じたとか、これ以上うまく慣れないなと思ったらやめる。

と語る。「自分の体に限界感じた」「これ以上うまく慣れない」Bさんの語りのように、彼女自身が本気でサッカーをする間、身体的な技術的な成長が重要になると言える。単にサッカーをして試合で勝利するだけではなく、自分自身の競技レベルを高めたいというBさん個人の目的を持ってサッカーを継続していることが分かる。

ここでBさんの中にはサッカーに対する見解が2つに分けられている。一方は「趣味みたいな感じ」のサッカーと、もう一方は「真剣に本気でやる」サッカーという見解である。現在、Kチームにおいて選手たちが語るサッカーとは後者の見解に当たると言える。よってBさんは、本気でサッカーに向き合えるチームに所属して、彼女自身の身体的な限界を感じるまで、サッカーの実力が向上されなくなるまでサッカーを続けるだろう。

(3) 所属チームへの愛着心と喜びの経験

——Cさん

Cさんは学生選手であったが、現在、スポンサー企業による採用を待っている10代の選手である。彼女は学生時代、怪我でサッカーができなかった時期もあった。怪我していた彼女は地元に戻り、リハビリを行いながら新しいチームを探していた際、地元チームであるKチームに入団した。Cさんは、サッカーをやり始め、今シーズンで3年目を迎える。怪我から立ち上がった彼女は、Kチームでサッカーを続けている理由について次のように語っている。

C：地元のチームから代表になりたいっていうのもあったし…あと、もう上がるだけっていうそういうチームで、なでしこリーグに行きたいっていうのもあるし、やっぱなんていうか、名前あるチームでセレクション受けるのもありかもしれないけど、自分が何一番やりたいかっていうと、最低からスタートしたチーム、自分自身も最低からスタート、チームも最低からだから、守っていくしかないっていうのがあって、それもKチームと自分自身同じだし、そっちの方が自分自身、自信付くっていうか…そうやってKチームをトップリーグに持って行きたい気持ちがあるから、Kチームで来期もプレーしたい。

「地元のチームから代表になりたい」という語りによると、Cさんはサッカー日本代表になることを

目指してKチームに入団して活動していることが分かる。彼女が日本代表を目指すやり方は「名前あるチームでセレクション受ける」という上位リーグに所属しているチームへ移籍する方法をとるのではなく、彼女が怪我から立ち上がることができた「最低からスタートしたチーム」でサッカーを続け、チームをトップリーグに上げる方法をとっていると言える。Cさんはチームに貢献しながら、彼女自身も日本代表になるやり方で、Kチームでサッカーを行っていると言える。

さらにCさんは「それもKチームと自分自身同じだし、そっちの方が自分自身、自信付くっていうか」と語っている。彼女はチームの位置づけと彼女自身の位置づけを同一視することによって、チームへの愛着を強めているのである。そのため、CさんはKチームに所属している上でサッカーに携わりたがっているのである。

彼女がサッカーに携わり続けるためには、これからの1年間をスポンサー企業で働きつつサッカーをするという日常生活を送らなければならないことになる。仕事とサッカーとの両立する日常生活についてCさんに質問すると、

C：シビアだけど、何て言うのかな。その（ゴールを決めた時の）一瞬の楽しさを知っちゃってるわけだから。それを求めて自然とやれるっていうか、まあ、シビアで、きつい時もあるけど、その一瞬の喜びっていうか、楽しさを求めて自分自身やっているから。

と語っている。Cさんは「シビアで、きつい時もあるけど」サッカーをやめずに続けようとしていることが見られる。前述したように、Cさんは日本代表を目指していると同時に、チームを全国トップリーグに持って行くということも常に意識しながらサッカーを行っている。しかし、その目標を果たすために仕事とサッカーという日常生活のスケジュールでの役割も充実にも果たさなければならないのが現実である。それに対してCさんは「（ゴールを決めた時の）一瞬の楽しさを知っちゃってる」と語る。そのため、シビアできつい日々の生活を過ごすことになっても、厳しい環境を乗り越えサッカーの楽しさと喜びを求めてサッカーを続けるのである。

(4) 選手間の関係性が競技継続過程へ影響する

以上のように、選手個々人が競技を継続する要因について彼女たちのライフストーリーから考察できた。ここで重要にしたいのは、選手はチームの目標を達成するためサッカーに取り組むと同時に、選

手自身が設定しておいた個人的な競技継続要因が別に存在している点である。言い換えると、選手個人的な目的を持って競技を継続しているが、選手はチームの一員としてチームの共通目標を追求しているのである。また、選手個々人はチーム中でチームメイトと相互作用を通して競技を継続していると言える。選手同士の相互作用で生み出される選手間関係性が、ある選手が競技を継続していく上で影響されていることが分かる。

A: 強ければ良いっていうもんじゃないし、チームとして団体（集団）競技だから。人間性も絶対必要だから。うまければ良いですっていうのは、自分の中ではあり得ないから。もちろん人間性とかも、それがやっぱり愛されるチームになってほしいから。

Aさんは同じチームで活動しているチームメイトに求めている望ましい選手像を持っている。その選手像とは、実力に秀でている選手ではなく「人間性」を備えている選手である。さらに、AさんはKチームが「愛されるチームになってほしい」という想いがあるため、それに適合する「人間性」がKチームの選手として「絶対必要だから」と考えている。このような、ある選手の考え方が他のチームメイトに求められる時、選手間関係性に影響する可能性が潜んでいるのである。

B: 自分が結構ふざけるキャラじゃないですか。最初は、ただふざけているやつだと思って「プロのくせにふざけてるんだと思ってた」と言われたこともあって、プロの選手もプロの選手なりにやっぱり、確かに他の選手は働いてて、絶対時間的にも厳しいし、体もきついと思うけど、やっぱりプロの選手ってそれがそのまま消えるように響くし…他の選手からの見え方とかもそれなりに気にするし、なんだろう、難しい。

Bさんは、他の選手から「プロのくせにふざけてるんだと思ってた」と言われたことがあると言う。またBさん自身も、他の選手の立場について「確かに他の選手は働いてて、絶対時間的にも厳しいし、体もきついと思うけど」と語っている。つまり選手たちは、同じチーム内でチームメイトの立場やその立場上の日常生活パターン及び行為の規範について選手たちが認識していることが見られる。そのため「他の選手からの見え方とかもそれなりに気にするし、なんだろう、難しい。」と語っているのでは

る。このようにBさんは、プロ選手としてのサッカープレーの質による不安を感じるのみではなく、他の選手との関係においても困難している様子が伺える。

以上、選手たちは同じチームの下で選手個々人の競技継続要因によって競技を実践すると一方で、選手同士の関係を意識しながら競技を継続しているのである。

5. まとめ

本研究は、日本の女子サッカー選手個々人がチーム内で競技継続要因を当事者である彼女たちのライフストーリーを3つ取り上げ、分析を展開したものである。3つのライフストーリーから選手である「行為者の生きられた時間を把握」[西倉, 2008: 39]しながら、選手個々人がKチームで競技を始め、競技を継続していく過程を記述している。

女子サッカー選手たちが、全国トップレベルを目指すチームで厳しい生活の中で競技を継続する要因は、次のようである。①決断した1年間はチームで競技を続ける（Aさん）ことや、②選手自身の競技レベルの向上や成長（Bさん）、③所属チームへの愛着とサッカー試合でゴールを決めることによる喜びの経験（Cさん）、ということを取り上げられる。しかしながら、とくに望ましい選手像ないし選手の立場に相応しい行為の規範といった選手の在り方が、選手個々人が競技を継続していく上で、選手間において誤解を招くことや困難として作用する場合もあることが伺える。つまり、選手はチームの下で競技を実践し継続する過程において選手間関係性に影響されるのである。

サッカーチームはサッカーを実践したい選手が集まってくるため成立可能になると同時に、個々人の選手が存在するからこそサッカーチームとして成立可能になると言える。よって本研究は、女子サッカーの制度や環境を問題化する視点から述べるのではなく、その中で生きる選手の視点から述べることで、現場の選手の声を提示した点を成果として言える。さらに1年間というシーズン単位を生きる女子サッカー選手たちが、競技を継続している過程におけるライフストーリーを記述することで「今をいきる」選手たちの在り方について考察する可能性が開かれると考えられる。

参考文献

Elise Edwards, 2013, “Fields of Individuals and Neoliberal Logics: Japanese Soccer Ideals and the 1990s Economic Crisis”, Journal of

Sport and Social Issues XX(X), 1-33

- 石山隆之・川名光太郎・平田竹男, 2009, 「関東大学女子サッカーリーグに関する研究——MARCHGゾーンにおける女子サッカー部創設の必要性と今後」, 『スポーツ産業学研究』19(1): 75-81
- ケン・ブラマー, 1995=1998, 桜井厚・好井裕明・小林多寿子 訳『セクシャル・ストーリーの時代——語りのポリティクス』新曜社
- 宮地弘子, 2012, 「ソフトウェア開発現場における自発的・没入的労働の相互行為論的考察——人々の社会学の視角から」, 『社会学評論』62(2): 220-237
- 西倉美季, 2008, 「異形の人々の対処戦略——顔にあざのある女性のライフストーリーから」, 『年報社会学論集』21:37-48
- 大勝志津穂, 2013, 「愛知県における一般成人女子サッカー選手の活動環境に関する研究」, 『スポーツとジェンダー研究』11: 43-56
- 田口禎則, 2009, 「日本女子サッカーリーグの現状と将来」, 『フットボールの科学』4-1: 11-14
- 東明有美・入口豊零・山科花恵・松原英輝, 2003, 「女子サッカーの日米比較研究(Ⅱ)——日本女子サッカーの歴史と現状について」, 『大阪教育大学紀要』第IV部門 第51巻 第2号: 433-451
- 輪田真理・入口豊・井上功一・山科花恵・東名有美, 2012a, 「日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望(Ⅰ)——日本女子サッカー(なでしこ)リーグの歴史と現状」, 『大阪教育大学紀要』第IV部門 第60巻 第2号: 15-28
- 輪田真理, 入口豊, 井上功一, 山科花恵, 東名有美, 2012b, 「日本女子サッカー所属クラブの現状と展望(Ⅱ)——浦和レッドダイヤモンズ・レディース」, 『大阪教育大学紀要第IV部門教育科学』61(1): 19-32
- 輪田真理, 入口豊, 井上功一, 山科花恵, 東名有美, 2013, 「日本女子サッカー所属クラブの現状と展望(Ⅲ)——伊賀フットボールクラブ・くノーに焦点を当てて」, 『大阪教育大学紀要第IV部門教育科学』61(2): 25-39

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

